「日吉昔話その1」（抜粋・編集）　奥泉勝雄

大正14年　電話線ほどの積雪での馬そり体験

「日吉小学校ＰＴＡだより　くまがわ第５号」（昭和59年３月）掲載

＊注：日吉小学校の授業で、日吉の昔のことを語ったことを文にしたため、文のつながりや省略などがあります。原文の味わいを損なわない範囲で言い回しや表現を編集したり、加筆しています。

（略）雪の一番多かった年は大正14年、これは、わし覚えており、あんなに多かったということはまずないだろうと思います。

（略）親父は内地から兄弟衆と来て気持ちのつながりが固かった。卯原内に親戚がおり、毎年欠かさず新年のあいさつというか、七草が終わって10日の間くらいには向こうからも来る、こっちからも行くという行き来がありました。

大正14年の正月、わしが５年生、弟が２年生かそこらでなかったかね。わしと親父と弟の３人連れで卯原内のおじさんのところへ行きました。その時は馬そりで、わしのところ（注：手師学、今の日吉）から８里、32キロほど、朝出て馬でぽつらぽつら行ったら向こうへ着いたらもう晩ですね。

行く時は、昔だから多少雪はあったけども、まあたいしたことはなかった。それから４～５日過ぎたら降るわ降るわ、もうどうしようもないくらい降ったもんだ。

＊注：大正14年１月12日から15日にかけての降雪・吹雪だと思われます。

「当直日誌」から抜粋

12日：雪

13日：吹雪、風強し。吹雪にして道路吹きだまり多く、交通最も困難なり

14日：風雪、交通困難を極む

15日：吹雪、引き続き吹雪激しい。午後よりやや静かとなる

16日：曇りのち雪、午後２時頃より雪

17日：曇り

（略）親父は家が心配なわけです。なんせ昔の掘っ立て小屋だから、雪がたくさん降ると潰れるんではないかと、屋根の雪落としをしなければと、これは危険ですからね。そして、カンジキ（当時は「てしま」と言っていた）を履いて、歩いて家まで帰って行った。

わしと弟は残って馬にエサをやったりして、１ヵ月あまり過ぎた頃、卯原内のおじさんに、わしらはまだ小さいのに「お前ら行けるか」と言われて、「うん行けるわ」と空元気出して、「そんなら行けや」と話して寄こした。おじさんとしては思いきり言って良かったと思い、わしらもそれで行ける気持ちになり、弟と馬で出た。

卯原内から常呂の市街までは、馬でじゃんじゃん走れるぐらいの道だった。常呂から豊川までは走ったり、まあいい道ではなかった。豊川から可児さんまで来たら、あそこから手師学までは人間がぽつりぽつりと歩くとこだけ、馬が歩く道は一切なし。５年生という小さい時だからどうしようかと思ってね。いよいよ何だから可児さんに行って泊めてもら

おうか、お願いせんかだめだと思ってね。
　この時、うちの親父さんがカンジキしょって、スコップ1丁持って「いやー、今日あたり来るんでないかと思ってスコップ持ってきたんだ」とやってきた。虫の知らせか、良くうちの親父さんが分かったもんだと思います。目からホント涙がこぼれるくらいうれしかった。可児さんのところまで来たら日が暮れた。スコップを持っていたから、馬が入るだけの穴を掘ってそこに入れ、箱馬そりの中にムシロが2枚くらい敷いてあったのを馬の腹から背中に巻いて、エサを全部やり、親父さんと歩いて帰ってきた。親父さんは、晩にも1回行ってみたんではないかな。
　で、その時の積雪は、まあ雪の上を歩いても、電話線を伝ってずっと歩けるくらいの積雪であったね。
　ええ、まずそれからはあれぐらいの大雪はなかったですね。
　馬は穴を掘ってそこに置いていた。なんぼ馬がかわいそうだからといって、自分の力だけでは馬の歩く道は掘れない。そのうちに天気が続いたから共同事業で道を開けました。昔は共同事業といって、雪が降ったら必ずみんなで、人間の手でスコップで雪を投げないと道が開かない。それは、わしらの年代の人たちは経験していることでね。
　まあ、それくらい雪が降りましたですね。本当に忘れることができないですね。

＊注：大正14年2月は、比較的天気が良く、この大雪に該当するのは、2月1日から2日にかけての吹雪ではないかと思われます。2月3日頃に卯原内から馬そりで自宅の手師学へ帰った途中の体験ではないかと思われます。

＊注：「当直日誌」から抜粋
　　1日：吹雪、暴風雪、交通途絶の状態
　　2日：吹雪
　　3日：曇り